

平成 25 年度版

協働のまちづくり大賞 事例集



平成 26 年 10 月
大 分 市

目 次

協働のまちづくり大賞について	1
----------------	---

【自治会活動部門】

25年度優秀賞

○廃品回収を財源としたLED防犯灯の整備（明野南町自治会）	2
-------------------------------	---

25年度奨励賞

○地域行事の参加状況改善活動（羽屋自治会）	4
○通学路の安全対策事業（南下郡東区町内会）	6
○高齢者のいこいの場 家島喫茶（家島自治会）	8
○地域住民での市道舗装作業（河内自治会）	10

25年度応募事例

○体操教室でコミュニケーション（月形自治会）	12
○グルメ旅行とミニバレーボール大会（角子原自治会）	14
○地域住民による公園美化活動（尾田自治会）	16

【自治会連携部門】

25年度優秀賞

○連合区で地域行事の引き継ぎと活性化（須賀連合区）	18
---------------------------	----

【自治会支援部門】

25年度優秀賞

○地域住民主権の子供の体験活動（下郡っ子いきいき倶楽部）	20
------------------------------	----

25年度奨励賞

○日岡郷土史編纂作業（日岡郷土史編纂委員会）	22
○自治会活動の若年層壮年層の取り込み（上芹親和会）	24

協働のまちづくり大賞について

協働のまちづくり大賞は、市民の皆さまに、市内でどのような自治会活動が行われているかを知っていただき、まちづくりの参考にし、自治会の更なる活性化につなげていきたいという思いから、平成23年度に創設されました。平成25年度は、単独の自治会での取組を表彰する自治会活動部門に8団体、複数の自治会・町内会が連携して取り組む活動を表彰する自治会連携部門に1団体、NPO法人・ボランティア団体・事業者などが自治会を支援する活動を表彰する自治会支援部門に3団体、全12団体からのご応募をいただき、その中から、特に他の模範となる優秀な活動を、優秀賞・奨励賞として表彰いたしました。

この度、平成25年度に応募のあった全ての活動事例をまとめた事例集を作成いたしました。

この事例集が、今後のまちづくりの参考となるだけではなく、今まで自治会活動に関心のなかった人たちにも自治会活動を知っていただき、関心を持つきっかけになればと考えております。

受賞団体

自治会活動部門

単独の自治会・町内会での取組

【優秀賞】

明野南町自治会

【奨励賞】

羽屋自治会

南下郡東区町内会

家島自治会

河内自治会

自治会連携部門

複数の自治会・町内会が連携した取組

【優秀賞】

須賀連合区

自治会支援部門

NPO法人、ボランティア団体、事業者などが自治会・町内会を支援する取組

【優秀賞】

下郡つ子いきいき倶楽部

【奨励賞】

日岡郷土史編纂委員会
上芹親和会

※会長名・代表者名などにつきましては、応募当時の方の名前を記載しております。

廃品回収を財源とした LED防犯灯の整備

自治会活動部門
25年度優秀賞

明野南町自治会
朝倉 正治

地域の課題

地球温暖化や、節電の推進など、エネルギー問題・環境問題の重要性は日増しに高まっている。

各家庭や企業では問題意識をもって取り組みを行っているが、自治会としては「節電しましょう」の呼びかけを行う程度で、それ以上の取り組みは行っていないかった。

そこで、自治会としても何か出来る事があるはずだと考え、実状の見直しを行った。

すると、自治会内にある防犯灯には水銀灯が使われており、これがエネルギーを大量に消費することで地球環境に悪く、さらに夜間長時間点灯するため高額な電気代を長年負担していることが明確になった。

自治会内には216灯の防犯灯が設置されており、このスケールメリットを生かし、何かできることはないかと考えることにした。

取り組み内容

地球温暖化を防止するために、自治会レベルでできることを考えた結果、防犯灯を節電効果が大きく明るいLED照明器具に交換すべきだとの結論に至った。

その資金捻出に当たっては、自治会費の値上げや自治会行事の見直しは不可能であるため、これまで資源有効活用で取り組んでいる廃品回収の売り上げを伸ばすこととした。

しかし、この事業を実施するには、住民の協力が不可欠であり、住民に地球温暖化のメカニズムとその影響、並びにその抑止のために自分たちに何ができるかを考え、防犯灯のLED化によるメリットを理解してもらう説得を行った。

これが一番大変であったが、町内にLED防犯灯が増えていくのと比例して、住民の意識も高まり、年々廃品回収の売上金が上昇していった。

【特に工夫している点】

- (1) 防犯灯のLED化にかかる費用を廃品回収により賄った。
- ① 利便性を配慮して回収場所を14箇所から24箇所を増設した。
- ② 実施曜日を土曜日から日曜日に変更して家族の協力を得た。
- ③ 回収対象物品を徹底させるため、解説写真を配布した。
- ④ 毎月の売上金額を提示し、啓蒙活動を継続した。
- ⑤ 住民だけでなく、学校や医院などにも協力を要請した。

(2) 防犯灯ごとの管理システム導入
防犯灯ごとに整理番号と管理番号を付け、位置と番号を示した地図も作成したため、電灯が切れたときやその近所で排水が詰まっているなど、自治会長が連絡を受けたときに、場所の特定が容易であるため、すばやい対応が取れるようになった。

活動の成果・今後の展望

廃品回収の売上金額のグラフを提示して、住民に対する啓蒙活動を継続した結果、年々売上金額が増加し、23・24年度と計画以上の防犯灯のLED化が実現した。

当初5カ年で防犯灯をLED化する計画であったが、25年度から市からのLED照明器具の無償現物支給制度が始まり、自治会の負担が半分になったこともあり、3年目で完了した。

全ての防犯灯のLED化が完了したことにより、年間150万円の電気代が今年度は32万円程度に減額されることが見込まれている。

また、地球環境に悪影響を及ぼす温暖化ガスの排出量の削減効果も非常に大きく、そのうえ水銀灯より明るいいため、安心安全のまちづくりができていく。

防犯灯をLED化するに当たって、住民が地球環境保全について考え、その費用を捻出するために力を合わせて廃品回収に取り組んだ意義は大きいと

思う。

また、自治会が負担する電気代が軽減されたため、それを住民に還元している。

平成24年度は省エネ意識向上を図るため、バス2台で八丁原地熱発電所を見学し、そのあと紅葉見物を楽しんだ。今年度は「明野地区体育祭」で選手、役員のほか、応援者にも弁当を配布することができた(約600名)。

これらの行事を通して住民のふれあいを深めることができ、地域コミュニティの再生にも役立っている。

今後は自治会活動をさらに充実させるとともに、現在間借り状態の集会場の建設基金として積立を行っていくたい。



廃品回収の様子



LED防犯灯

地域の行事の参加状況改善活動

自治会活動部門
25年度奨励賞

羽屋自治会
高屋 亨



天満社祭りの様子

地域の課題

羽屋町内は元々住んでいる人と、新しく編入した人の割合が1・8ぐらいで、住みやすい所ではあるが、隣所の付き合いが少なく、盆踊りや天満社の祭りなどで参加者が少ないのが悩みだった。

また、防災訓練などの各種自治会行事に、高齢者の参加状況が低調であるという課題があった。

取り組み内容

役員会で考えた末、盆踊り、祭り、災害訓練などに、組長会、回覧で呼びかけることにした。

役員会は、地域課題の解決を図るため月1回開催しており、決定した事項、行事は、随時回覧し住民に周知徹底を図っている。

また、町内会、敬老会、民生児童委員などと連絡を密にして高齢者が参加しやすい競技であるスマイルボウリン

グ大会を行ったところ多数の高齢者が参加してくれた。

その後も、各種行事において参加者が増加するという波及効果が見られた。

【ふれあい活動】

早朝あいさつの声かけ

(毎週月曜日、豊府小学校前)

防犯パトロール (水曜日、金曜日)

ひまわりの栽培

公園の草取り

市民いっせいごみ拾い

盆踊り大会

敬老会

子どもみこしの参加

これらの活動を行って、交流と親睦を図り、絆を深めている。

【特に工夫している点】

①盆踊り

やぐらを組み生演奏で実施。

参加賞・抽選会を組み入れ、育成部、老人会とも協力し、例年30〜50人だった参加者を今年は450人とすることができた。

②天満社祭り

子供みこしを新たに購入、3基のみこしが町内を練り歩くことができた。

鐘、太鼓の練習にも取り組み、育成部の協力も大きかったが、子どもたちが自分の町内の祭りという意識ができ、父親の参加も増えつつある。

③災害訓練

組長に組長会のとくに参加を呼びかけ、地域のわずかな人数の中から40人を超える人の参加があった。

これらのことは災害時などお互いの顔を知り合わねばならない非常時の心強い協力体制に役立つと思われる。

④非常の備蓄

年々備品を整備し非常時に備えると同時に、町内の人たちと情報交換しながら、人命の大切さと、協力体制の確立、知識の導入、消防署や警察、市と連絡を取り合い町内和気藹々の^{わかあいあい}気風ができてきたのは、うれしいことで、より良い町内を目指してこれからも努力していきたい。

活動の成果・今後の展望

組長の協力もあり、地域活動は年々良い方向に向かいつつある。

組長、育成部の役員は毎年交代するので、始めからやり直しのところもあるが、役員交替時に次年度の役員に申し送りできるよう町内会も指導する必要がある。

今後スポーツやあらゆる会合に役員も出席し、町内より災害が発生した時には人災が起こらないよう、全員が協力できて共助の力で乗り切れるよう考えている。



防犯パトロール



ひまわりの栽培

通 学 路 の 安 全 業 対 策 事 業

自治会活動部門
25 年度奨励賞

南下郡東区町内会
原田 晃

地 域 の 課 題

下郡小学校関係者と自治会が共同し「通学路の安全性の点検」を実施したところ、小・中学校が通学路と指定している市道の一部が実際の幅が4.06メートルと狭い箇所があった。

この道路は、学童の通学時間帯に路線バス2台と通勤車両が約150台通過し、バスと車両の離合の際には、道路の幅に全く余裕が無く、学童は体によじって通行しているという極めて危険な状況であるため、早急に対策を講ずべき課題であるとの共通認識を持つに至った。

この危険通学路を利用する学童（小学生約70人・中学生約30人）は主に南下郡東区に居住することから、自治会役員会で検討し、東区が解決すべき重大かつ緊急な課題であることを確認した。

取 り 組 み 内 容

この道路沿いには、コンクリート造りのごみステーションがあり道幅を狭くしている一因となっていたが、移動させることは困難であった。

また、道路自体の拡幅も現実的ではないことから、町内会としては危険箇所を通らなくても良いように地区内の里道を迂回路として整備することとした。

しかしながら当時の里道は耕作放棄した畑の中に造られた幅員90センチの道であり、雑草・立木等によりとても安全な通学路とは言えないものであった。

子供たちの安全を守るといふ思いから町内会では地権者をはじめとする関係者に対し里道の整備への協力を求め市をはじめとする関係機関を30回以上訪問するなどしてなんとか工事の着工にこぎ付けることができた。

通学路が完成した日には早朝から下郡小学校から校長・教頭をはじめ多数の教職員が新設通学路に配置され、学童の通学指導に当たり、無事通学路を開通することができた。



完成した通学路を通る児童

活動の成果・今後の展望

通学路に通ずる地域内道路からの市道取付口が狭かったため、地権者の所有地と区の共有地を同積交換することにより、道路取付口を2倍に拡大することができ、もう一つの地域の長年の問題も解決できた。

この結果、通学路が便利かつ安全な地域道路になり、学童だけでなく地域住民の通学路の活用が広がっている。

地域住民から通学路に対する防犯灯の設置の要望を受け、市関係機関に依頼し、アルミ製ポール支柱のLED使用の防犯灯を設置した。

このため地域住民は、ここを夜間の安全な散歩道路として活用している。今後、通学路の両サイドに花などを植え付け、潤いのある地域道路に成長させることを展望している。



完成した通学路



高齢者のいこいの場 家島喫茶

自治会活動部門
25年度奨励賞

家島自治会
徳丸 健治



地域の課題

家島地区は70歳以上の高齢者が30%以上となり、急速に高齢者が増加している。

また、高齢者の方は外出することが少なくなり、隣近所との会話も無くなりがちで、地区民間の接触の機会が減ってきている。

また、一人暮らしの女性世帯も増えている。

そのため高齢者の寄り場・いこいの場・ふれあいの場として公民館を開放し、「家島喫茶」して開店した。

取り組み内容

毎月、第2・4火曜日（開店当初は木曜日）の13時～16時に開店している。

喫茶の決まりごとを「仲良くする」と「あいさつをする」の2点とし、「好きな時に来て、地域の人と会話を楽しんで、好きな時に帰る」という気

軽に立ち寄れる場として提供している。お世話をするボランティアを募集したところ、24名の応募があった。(平均年齢71歳)

ボランティアの主な仕事は、接待と高齢者の「話し相手になる」ことである。

メニューはコーヒー、お茶、紅茶、少々の茶菓子をを出している。

連続して3回程度顔を見せない人がいたら、見回りにいくこととしている。また自治会のニュースなどを伝えたりしている。

【特に工夫している点】

来店者は平均50人前後あり、高齢者に大いに喜ばれている。

ボランティアの参加は毎年15人程度あり、役員とともに約20人ぐらいで運営している。

高齢者の安否確認・見守りの場ともなっている。

来店を促すため、開店当日の12時に地区内放送をしている。

自治会で予算措置をして、自治会の予算だけで運営している。(年6万円)



家島喫茶の様子

活動の成果・今後の展望

【活動の成果】

地区内であいさつをする人が増え、地域コミュニティの活性化につながっている。

高齢者や地区民・ボランティアの間の交流も活発になり、「生きがい・やりがい」のある場となっている。

地区民が自分の畑で取れた芋や漬物を持ってきたり、饅頭などを差し入れてくれたりするように、地域の輪が広がっている。

他の地区の人から「家島はそんないい場所があっていいな」と言われ、地区民の自慢の場となっている。

【今後の展望】

地域住民の健康づくりは「サロン活動」、「家島喫茶」の2本立てで、高齢者及び地区民の生きがいづくり・健康づくりを行っていききたい。

の 地 域 住 民 で の 業 作 装 舗 道 市

自治会活動部門
25 年度奨励賞

河内自治会
河田 直志



舗装が完成した道路

地 域 の 課 題

河内自治会は、別府湾沿いの国道197号線から南方向の山へと続く市道（本神崎河内2号線）沿いの集落である。

自治会内の道路はとても狭く、津波が海岸部分へ到着した場合、他の地区へと繋がる道が1本しかない。

市道（佐賀関町時代は町道）ではあるが一部舗装されていない箇所のある本神崎河内2号線は、大雨が降ると路肩が崩れるなど農林作業者の通行に支障が出ていた。

取 り 組 み 内 容

【舗装作業】

河内地区では旧佐賀関町に舗装の延長を要望していたが、財政難のため実現できなかった。

舗装の延長を希望する河内地区は、「作業に要する労力は地元が行うので、材料のコンクリートを提供してほしい」と旧佐賀関町に要望し、実施すること

になった。

合併後は、大分市から生コンクリートの支給を受け、舗装活動に毎年取り組んできた。

平成25年11月、約9年の年月を掛けて、延長約2キロメートルの舗装を完成させた。

毎年の活動は、4月当初に、大分市道路維持課へその年に舗装しようとする区間について申請する「原材料支給願い」の提出が始まる。

大分市での審査の後、交付決定を受けると、舗装作業をする時期を決定する。

申請する箇所は地域で協議し、「穴ができる箇所・傾斜がある箇所」を優先して早期に行った。

地区人口が少ない河内地区では、作業可能な人を集めるには苦労があった。作業協力の依頼案内を地区内全世帯に届け、作業できる人を募った。

【特に工夫している点】

河内地区で森林を有する方の集団からも人員の協力を得た。

高齢化が進んでいる佐賀関地区では、

作業する人はいずれも高齢である。

舗装作業の経験がある人を中心に約20人ほどが毎年集まった。

作業は、2.5×3メートルの道路幅員に厚さ約15センチメートルの型枠を設置し、生コンクリートを流し込む。下地を整える重機や道具・型枠もすべて地元で準備した。

コンクリートをならす作業には長靴を履いた住民が手分けして取り組んだ。型枠を組むのも、道路の表面を平らにするのもすべて地元の手作業で行った。

この道は、万が一地震や津波で国道へ通じる道が閉ざされた時、他の地区へ避難するための唯一の避難道であり、大分市の森林セラピーロードに指定されている「もみ樅のき木山」へと通じる道でもある。

このため、舗装が完成したことは地元住民はもちろんのこと、山を利用する他地区の方々、例えば猟友会の方々からも喜ばれている。

活動の成果・今後の展望

【活動の成果】

舗装する前は、大雨のたびに通れない状態が続き苦労した。

作業は9年を費やしたが、作業を通じて、地域住民が顔を会わせる機会となり、同じ汗をかく事で絆がより強くなった。

【今後の展望】

市道が舗装され道が通りやすくなった。

この道を活用して、これまで、車では行きにくかった河内自治区の山林で、多くの人に散歩や山菜採りを楽しんでもらいたい。



舗装作業

体 操 教 室 で コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン

自治会活動部門
25 年度応募事例

月形自治会
安東 万人



体操教室の様子

地 域 の 課 題

吉野地区の東部に位置する月形自治会は65歳以上の方が約48%で、少子高齢化が進んでいる地域である。

特に人口130人の内、70歳以上の在宅の方が34名おり、この方たちの健康維持や老化予防、介護予防、また、ひとり暮らしをしている高齢者7名の方の安否確認が自治会の大きな課題となっている。

取 り 組 み 内 容

【体操教室】

少子高齢化が進む中で、活気のある地域にしていくためには、高齢者が元気であることと、交流が図れる機会や場所を増やすことが大事であると考え、自治会で話し合いを重ねる中で高齢者の健康維持や老化・介護予防、さらには高齢者が集う場づくりを目的に、月形公民館で毎月2回の体操教室を開催することにした。

インストラクター（講師）には、地区の状況や高齢者の健康状態などもよく知っている地区内の人で、大分市民健康ネットワーク協議会の運動指導者講習を修了した方に依頼している。

毎回、高齢者を中心に約20名の方が参加して、大分市歌を歌った後、グーパージャンケン、早口言葉などの脳トレーニングをはじめ、腹式呼吸体操、ボールを使った筋力トレーニング、マッサージ、歌って踊る健康音頭などを行っており、「無理をしないで、頑張らないで、息を止めないで楽しく体操」をモットーに皆さん楽しみながら、できる所で体を動かしている。

体操が終われば和気藹々とお茶とお菓子で世間話や健康談義に花をさかせており、地域の住民の交流の場にもなっている。

【特に工夫している点】

吉野校区で最初の「体操教室」であったため、発足まで約半年間準備を要した。

開催日時は、老人会の集まりを利用

して、皆さんの希望を聞き「月2回火曜日・10時から」に決定した。

地区内の独居の高齢者、昼間は一人の高齢者については、安否確認のため、お互い同士や隣近所による声掛けと併せて、健康状態などの確認もお願いし、変化があった場合には連絡をしてもらうようにした。

月形公民館は原則座布団仕様になっているが、高齢者の中には床に座ることが困難な方もいるので、その方の為に椅子（折りたたみでは無い）を準備した。

体操用具（ボール）も会費で調達した。

インストラクターも地区内の人であり、寒暖や天候、参加者の健康状況にも配慮して体操のメニューを工夫している。

活動の成果・今後の展望

体操の効果については、「体が軽くなった」「夜がよく眠れる」「手先・足先が暖かくなった」「体操に来るのが楽しい」などの声が多く聞かれるよう

になり、新しく始めた人も継続して体操を行っている。

高齢者の安否情報が、隣近所の声掛けにより、多く入るようになった。

高齢者が集い、コミュニケーションが図れる場所づくりができ、参加者から喜ばれている。

今後の展望としては参加者から回数を増やして欲しいとの意見が多く、インストラクターと協議して毎週できないか検討中である。

高齢者予備軍（65歳以上）の方などにも積極的に参加を呼びかけ、活動の輪を広げることにより地区住民の健康増進を図り、ひいては国保負担の軽減、介護予防に貢献できればと思っている。



体操教室の様子

グルメ旅行と ミニバレーボール大会

自治会活動部門
25年度応募事例

角子原自治会
首藤 太一



ミニバレーボール大会の反省会

地域の課題

近年、転入者が増加し、新住民が半数以上を占める状況となったことから、自治会活動や地区内行事を通じて、新旧住民の交流を図り、相互に助け合うことが課題となってきた。

取り組み内容

【グルメ旅行】

グルメ旅行は、住民にアンケートを取り、住民の交流の場として何が良いかを集計した結果、若い人からお年寄りまで参加できる行事として決まった。第1回目は、臼杵の「フグ料理」に決まり、参加者を募集した結果、135名であった。JRで往復し、食事後に臼杵の町を散策し、新住民との交流ができた。

第2回目は、湯布院の「豊後牛料理」であったが、前回と同様の参加者があり、人気行事となっている。

【ミニバレーボール大会】

ミニバレーボール大会は、新住民に若い人が多く、新旧住民が交流できる行事として計画された。

地区が4つの講中（角子原自治会の独特な組織で、1講中は3〜6班で構成され、講中会長、各理事2名、各班長、その他役員で運営されているグループ）で、一二三会、紅葉会、三和会、栄友会に分割されており、その講中親善大会として開催されている。

試合は、シニア（中年層）、フレッシュ（若年層）で、各4チームがリーグ戦でやっている。試合後は全員で反省会を公民館で開催し、大いに盛り上がり、新旧住民の交流が深まっている。

【その他の活動の取り組み】

ふれあいレディさくらまつり

夏祭り太鼓ならし

敬老祝賀会

コスモスふれあい祭り

天満神社越年行事

クリーニンググリーン作戦

（角子原美化作業）など

【特に工夫している点】

講中親善ミニバレーボール大会では、講中会長に選手の選出や練習（週1回〜6回）への参加をお願いしている。

自治会の役員には、講中より選出の理事2名がおおり、その代表として意見・要望が出され、運営がスムーズに行っている。

活動の成果・今後の展望

新旧住民の交流を図ることにより、自治会活動が活性化される取り組みができています。

また、今後も新しい転入者が増加すると思われるので行事などに参加呼びかけをしていきたい。

自治会のスローガン「向こう3軒両隣、いつも笑顔であいさつ角子原」を大切にし、自治会住民が住みやすい環境を心がけたい。



地域住民による 公園美化活動

自治会活動部門
25年度応募事例

尾田自治会
廣田 智信



公園美化活動

地域の課題

尾田西児童公園は、周辺の子どもたちが多く利用し、また隣接する障がい者福祉施設の皆さんも利用する公園である。

同公園は子ども会の保護者によって今まで美化活動が行われていたが、雑草の繁茂に追いつかずに解散した。

徐々に荒れ始めた公園を管理するため、自治会が尾田西児童公園愛護会を結成し、活動を開始した。

取り組み内容

【公園美化活動】

子どもたちも含め、自治会全体で美化活動をするべきだと考えて、参加を呼びかけている。

小学生・幼稚園児14名が集団登校前の10〜15分で毎日草取り作業を行っている。

また十数名の自治会有志による草刈り機を使った除草作業とグラウンドの

草取りを行っている。

障がい者福祉施設の皆さんにも、草刈り機で刈り取った草の回収とごみ出しを手伝ってもらっている。

公園の利用者が自分たちで公園の美化活動を行うという形ができています。

【特に工夫している点】

○子どもたちは自分たちの大切な遊び場所であるので、清潔に安全に使用するようになる。

○地域自治会の方は、自分たちの子どもや孫が元気に楽しく安全に遊べる場を提供する。

○世代を超えて協力して公園の維持管理に努め、大切に永く楽しい集いの場としていきたい。

○障がい者福祉施設の皆さんには、気持ちよくベンチで話したりする憩いの場としての公園や清潔なトイレを提供する。

○小学校校長や、障がい者福祉施設の常務理事へお礼の手紙を書いた。

○刈り取った草を石灰と混ぜて肥料にしている。できた肥料は地区の花壇に使うと考えている。

○きれいになった公園で、餅つき大会など、慰労の場を設けようと考えている。



公園美化活動2

活動の成果・今後の展望

【活動の成果】

子どもたちの公園を大切にやる心が育ち、ゴミが減り、トイレや水飲み場へのいたずらが少なくなった。

また、愛護会の活動に賛同し、作業に協力してくれる有志が増加傾向にある。

【今後の展望】

現在の活動だと、草刈りが間に合わないことがある。

今後は一斉清掃の日などに合わせて有志を募り、自分たちの家の周りだけでなく公園も掃除してもらおうことで、さらに参加者を増やし、楽しく清潔に利用できるきれいな公園を保ちたい。

連合区で地域行事の 引き継ぎと活性化

自治会連携部門
25年度優秀賞

須賀連合区
片山 靖夫

地域の課題

近年は、空き家や空地が地区内に目立つようになってきている。

「黒砂・御幸・真砂」の3地区は、現在のPPC佐賀製錬所が大正5年に操業開始した時、工場予定地に居住していた住民の移転先として誕生した自治会である。

その3地区で昔から傳承されてきた伝統行事が、少子高齢化や地元定住意識・地元意識の低下により衰退してきた。

同じ歴史を持つ3地区が、仲良く協力して地域行事を次世代に引き継ぎ、活性化することを目的に、旧居住地の字名「須賀」を冠として連合区活動を開始した。

取り組み内容

7月「宮籠り（田植えの後に五穀豊穡と家内安全を祈願する伝統行事）」
平成25年度は60人参加。会費制で

食事を共にすることで、地区民が語らい、地域の絆を深めるきっかけとなっている。

7月「早吸日女神社夏祭り」
老人会、青年部が行うテナント出店へ協力。

9月「山神社大祭（須賀地区の鎮守）」
式の中で、地区内に居住する宮司から山神社の歴史や須賀地区の謂れを聞く。

10月「敬老会」
平成25年度は65人が参加。70歳以上の方を招待し食事を共にする。お楽しみ行事もあり。

12月「忘年会」
平成25年度は70人が参加。3自治会の全世帯に案内し、会費制で実施。

高齢者には送迎も準備する。食事を共にすることで、語らいの場となっている。

ビンゴゲームやカラオケのほか、有志による劇などの余興を毎年演目を変えて実施する。

3月「津波避難訓練」
80人参加、まずは、1次避難場

所まで避難し、更に2次避難所へと避難する訓練を行う。防災講話も行う。

【特に工夫している点】

① 輪番制の班長に連合区主催行事のスタッフとして参加してもらった。このことにより、仕事や家事に忙しい現役世代に連合区の活動を理解してもらった。

② 自治会活動に無関心であった男性陣に対して「力仕事なので、男性の力が必要」と、伝統行事の職^{のぼり}立てや会場作りに協力を仰いだ。

その結果、50～60歳代の男性による自治会活動への更なる参加に結びついた。

③ 連合区主催の忘年会を会費制で行い、若手（50～60歳）に余興への参加を促した。

④ 伝統行事を通じて、地域の歴史や成り立ちを古老から聞く機会が増えた。

そのことが、地域への愛着心の増加と誇りへと結びついた。

⑤ 行事参加者の9割以上が高齢者であ

り、任意団体である老人会に所属しているため、老人会活動（有価物回収・夏祭りテナント出展）を手伝うことで、高齢者との意思疎通と連帯感を図ることができるようになった。

⑥ 3月11日の前、日曜日に津波避難訓練を行う。

須賀地区は、海に面した海拔2～3メートルの埋立地にある。

そのため、津波に対する危機意識が高く、いざというときに速やかに避難できるかどうかという住民の不安は強い。

そこで、日ごろから災害時を想定した取り組みとして、避難経路を確認し速やかに避難する訓練を毎年実施している。

これには、多くの地区民が参加している。

活動の成果・今後の展望

【活動の成果】

狭い地域に隣接している自治会でありながら、他2自治会の方の名前を知

らないなどの状況があった。

連合区としての活動を開始してからは、地域に連帯感をもたらすことを目的に、老人会、ボランティアグループと相互に連携して活動している。

このことにより、幅広い年齢層が、互いに気心が知れるようになり、顔が分かり声を掛け合う関係となった。

連合区としての活動を重ねることが、高齢者の安心を確保するだけでなく、誰もが住み良い地区に繋がると確信している。

【今後の展望】

これから続く少子高齢化社会では、高齢者が地域の中心となり活躍することが大事である。

地域活動の場に、高齢者が健康的に元気な姿で活躍する姿があるので、退職して間もない方々や子育てを終えたばかりの方々などの後に続く世代が、積極的に地域活動への参加を求めてくるようになった。

このような顔が見える関係を育てる中で、自治会活動・まちづくりを継続していきたい。

地域の住民主催の 子供の体験活動

自治会支援部門
25年度優秀賞

下郡っ子いきいき倶楽部
関京子



下郡っ子いきいき倶楽部の様子

地域の課題

平成18年頃、全国的に児童の安全を脅かすような事件が起こり、下郡校区においても心配な事案が起こった。そのため、地域に根ざした児童育成の場を広め、安全で住みよいまちづくりに取り組む事業を始めた。

取り組み内容

子どもの体験活動を中心にすえ、学校、家庭、地域が一体となって取り組む。

【活動内容】

実行委員会を組織し、幅広い人材を確保し運営している。

年3回の体験活動（8年間で延べ6,400人の児童の参加）に加え、昨年より小学5年生の稲作体験、小学1、2年生の芋掘り体験にも側面から協力している。

P T A行事にも協賛、参加している
(餅つき大会など)。

【体験活動例】

木工工作、竹細工、科学実験、ふるさと菓子作り、ビーズ細工、コンピューター教室、折り紙、ダンス、紙芝居、稲作体験、芋掘り体験など活動は年々定着している。

【特に工夫している点】

たくさんの方の体験をさせるために、自分のやりたいことについてアンケートを取っている。

地域の方が参加できるように自治会の回覧を通じて知らせている。

実行委員や指導者は揃いのTシャツを着用している。

事故や怪我の無いように地域の方々、保護者、先生方も見守りのもと、活動をしている。

活動の成果・今後の展望

【活動の成果】

- ①この活動を始めてからは児童の安全を脅かす事件は1件も起きていない。
- ②児童が積極的にあいさつをするようになった。
- ③地域の高齢者が児童との交流を楽しみとし、生き生きとしてきた。
- ④児童が意欲的に取り組むようになった。
- ⑤学校、公民館、自治会、老人会、P T Aなどの連携が強まった。

【今後の展望】

- ①スポーツなども含め、幅広い体験活動の場を提供したい。
- ②人材の発掘、後継者の育成。
- ③「ふるさと下郡」を愛する子どもたちに伝統ある行事として定着させたい。



科学実験



木工工作



ふるさと菓子作り

日岡郷土史編纂作業

自治会支援部門
25年度奨励賞

日岡郷土史編纂委員会
牧和人



県知事へ郷土史完成の報告

地域の課題

核家族化の進行や、地域コミュニティの希薄化、世代間交流の希薄化により、子どもたちが自分たちの住んでいる地域の歴史を正しく認識する機会が減少している。
そうした中、地域の歴史の変遷の様子を地域住民が再確認することや、次世代を担う子どもたちに語り伝え、郷土を愛する心を持たせることが課題であった。

取り組み内容

地域住民が「日岡郷土史編纂委員会」を結成。

区長会と連携しながら日岡中央公民館での月2回の会議を中心に、現地調査を重ね、地域住民手作りの郷土史を作成、平成25年6月に完成した。

完成した郷土史を用いて様々な場所で学習会などを開催し、日岡の歴史を再認識することができた。

【自治区での学習会】

(参加者 平均約20名)

新貝、高松、新高松東、新高松西、花高松、向原西、向原東、西原

【読み聞かせ】

平成25年10月

第1木曜日 日岡小1、2年生
第3木曜日 日岡小3、4年生
講師・あすなろ

(日岡校区の読み聞かせグループ)

【出前授業】

10月5日、10月31日、12月7日
日岡小6年生 81名
講師…編纂委員長

【学びのひろばイン日岡】

(おおいたふれあい学びの広場事業…生涯学習課)
9～12月(月1回、全4回)
講師…編纂委員 平均約25名参加

【歴史探索ウォーキング】

新貝天満社・豊原神社・鷹松神社を巡り、歴史の解説。
講師…宮総代 170名参加

【特に工夫している点】

郷土史の内容について
○子どもに分かり易いよう平易な文書とした。
○文字も大きくし、写真や地図をふんだんに取り入れている。
郷土史発行の広報について
○ケーブルテレビ、大分合同新聞、読売新聞、日岡中央公民館だよりなど

のマスメディアを積極的に利用し、PRした。

郷土史を利用した学習会について

○日岡小学校での児童を対象とした読み聞かせ、出前授業など、小学校と連携して取り組んでいる。

以上、郷土史が完成した後も、様々な場面で活用していくことで、地域コミュニティの活性化を促進していく。

活動の成果・今後の展望

○地域の歴史に関心があった住民が中心となり結成された「日岡郷土史編纂委員会」であったが、歴史資料の聞き取り調査、取りまとめなどの活動をしていくうちに、自治会をはじめ多くの住民との間に交流が生まれ、地域住民が自分たちが生活している地域の歴史へ関心を持つ良いきっかけとなった。

○校区内の全自治区(8自治区)が自主的に学習会を行い、地域住民が地域

の歴史を再確認する良い機会となった。

○校区の歴史を学習することにより、日岡校区への愛着が更に深まり、校区の一体感が高まった。

○講師となった住民は地域住民へ講義をすることにより、まちづくりリーダーとしての自覚が大きくなった。

○小学校児童が地域の歴史を正しく認識することができるよう、読み聞かせや出前授業を開催することにより地域と日岡小学校との連携が深まった。

今後は自治区での学習会を定期的に開催し、地域住民の地域への誇りや愛着を更に深め、地域コミュニティを活性化していきたい。

また、小学校での読み聞かせや出前授業を続け、子どもたちが地元愛を持ち、地域の人たちに大きな声であいさつできる日本一のあいさつができるような学校づくりに、地域と小学校が連携して取り組んでいきたい。

自治会活動の 若年層壮年層の取り込み

自治会支援部門
25年度奨励賞

上芹親和会
佐藤 吉一



会員によるしめ縄づくり

地域の課題

上芹親和会は、自治区内の融和や、親睦を図るために約50年前に結成され、活動を続けてきた。

近年、上芹自治会では世帯数が増加、巨大化してきており、旧来からの自治会活動や住民が求める活動をどう活性化するか、また、住民同士の交流、住民相互が助け合う体制を構築することが課題となっている。

取り組み内容

結成当時は、会員総数40数名(平均年齢30歳代)であった。

現在、25名(平均年齢50歳代)であるが、年間を通して、ボランティア精神で縁の下の力持ちとして、敬老会での会場設営、接待、片付け、熊野神社清掃活動、敷地内の山の草刈、本殿の清掃などあらゆる自治会活動、自治会行事のサポートを行っている。

【特に工夫している点】

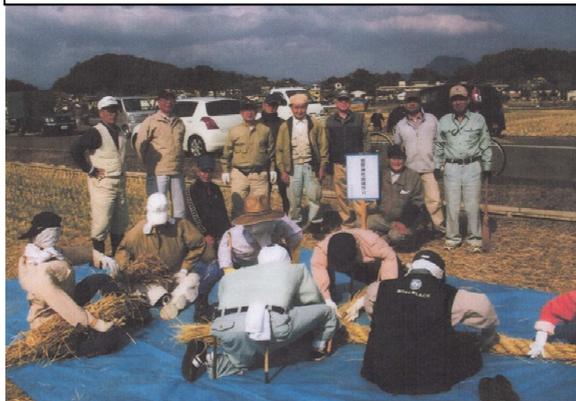
何か自治会の役に立ちたいという思いから結成されたが、現在では自治会と二人三脚であらゆる行事に携わり、なくてはならない団体となり、自治会の実働部隊として頼りにされている。

また、地域住民の相互の助け合いの重要性を説き、親和会会員の加入促進を図っている。

現在、自治会活動も時代を反映した内容が求められている。
高齢者に偏りがちな活動に、壮年層・青年層を取り込んでいくことが必要であるため、特に加入を呼びかけている。



会員で作成した「かかしまつり」の作品



上芹自治区敬老会

活動の成果・今後の展望

会員の勧誘に努めた結果、マンションアパートに住む若者などの加入があり、現在会員数は25名となっている。
今後さらに2〜3名が加入見込みであり、新住民との融和も徐々に進んでいる。

自治会活動のサポートに、親和会以外の地域住民の参加が見られるようになり、地域活動の輪が広がっている。

現在、上芹自治会は自治会員世帯数480戸とマンモス自治会となっており、今後も増加が予想されているため、自治会行事も内容の検証、再編成が必要となってくる。

当会もその役割を担っていく。

これからも、強力に自治会活動をサポートしていきたい。